はじめに

教師の資質の向上、初任者教育、教員研修など、教師教育に関する課題は数十年前から毎年言われてきている。

また、新しい教育方法もその内容をよく考えてみると、すでに数十年、数百年、千年前に出てきた事柄に少し色を変えて新しい方法のような顔をして出てきている。このようなことに対し、かつて木田宏先生は「確かに、教育研究者等が欧米の教育を取り入れる必要はあるが、もう少し江戸時代、さらにその前の教育史の研究をすべきではないか」と話をされていた。

木田宏先生の指摘のように、ここ数十年の教育実践を振り返ってみても、その中から新しい展開の基礎資料、また継続すべき実践が多々ある。

そこで、今回岐阜で学習システム研究会（SIS-TEM）の設立の基礎研究を行った岩田晃先生（初任教員）と坪内弘校長先生の教育実践について、資料集として紹介する。

岩田晃先生は、昭和 42 年（1967 年）3 月に岐阜大学を卒業し、岐阜県羽島郡笠松町の松枝小学校に初任者として赴任され、昭和 45 年に西武芸小学校へ転勤された。（昭和 50 年の年末に亡くなられた。）この初任者として勤務された 3 年間の教育実践は、岐阜大学との共同研究や学習システム研究会の設置と新しい教育実践研究の発展に大きな貢献をされた。その研究成果は、今日までも関係者が利用していて、たとえば沖縄の 2013 年からの学力向上の基礎資料は岩田先生の基礎研究が大きく関わっている。また、発問の学習者の反応、1 時間の授業の構成、話し合い、実験などの学習活動の反応を用いた基礎データの収集は、岩田先生の研究である。

50 年後の今、この資料を見ても古く感じることはなく、いまだに新しい研究のヒントを与えてくれる。岐阜女子大学の学生、院生の方々に、ぜひ、この資料から新しいヒントを得て教育実践研究を進めてもらいたい。

この資料は、岩田晃先生が亡くなった後に後藤が岩田家を訪問した際に、お母さんから遺品の中から「よろしければお持ちください。」と言われ、風呂敷一つ分の資料を選び持ち帰り、その後、私の研究室で大切に保管していた。ところが、退職時に不明になり、その後興戸律子先生が見つけてくださった。再度見てみると、松枝小学校勤務時代（3 年間）によくこれだけの実績を残されたと感動した。（この資料は全体の中の一部である。）

岩田先生が担当した子どもの成長を見て、地域の人たちに「麦飯を食べても学校を良くする。」と言わせたことは、教育の確かな評価であろう。現職教員に対する「教師力の資質の向上」の指導もこの程度にすべきであろう。

教育実践を残してくださった故岩田晃先生、坪内弘校長先生、資料を見つけ出してくださった興戸律子先生（岐阜大学）に感謝し、当時の一部を報告した。

2016 年 2 月

岐阜女子大学
学長　後藤　忠彦